

新·水滸傳(二)

人間山水図卷他



吉川英治全集

第43卷

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

著作権者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・43

新・水滸傳(二)

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式會社 講談社

東京都文京区音羽二―二二―二
電話東京九四二局一―一―一(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式會社

製本所 藤沢製本株式會社
本文用紙 日本バルブ工業株式會社特漉

第一刷発行 昭和四十二年六月二十日

定価 六百八十円

© 一九六七年 吉川英治

目次

新・水滸傳(二)	一
篝火の女	一七
御鷹	二二
魚紋	二三
鍋島甲斐守	二四
死んだ千鳥	二五
凧かみ浪人	二七
夕顔の門	二九
夏虫行燈	三三
山浦清磨	三五

人間山水図卷	小野寺十内の妻	小野忠明	高橋泥舟	林崎甚助
--------	---------	------	------	------

四七	四七	四二	三九	三五
----	----	----	----	----

山崎百々雄 (山浦清麿)	中尾進 (篝火の女) (漣かみ浪人)	さしえ 杉本健吉 (新・永壽傳)
-----------------	--------------------------	---------------------

新·水滸傳
(二)

宋江、約を守って花嫁花智を見立て。「別芸題」に女優白秀英が登場のこと

宋江、約を守って花嫁花智を見立て。

「別芸題」に女優白秀英が登場のこと

『このほうは登州与力の裴鉄面だが、奉行の逮捕状を帯びてこれへ参った。当家的あるじ李応を出せ。有無を申さば、官権を以て召捕るまでだ。』
威猛だかである。

屋敷じゅうは慌てふためいた。

李応はまだ片手を縛り帯して首に吊っている。かくと聞くや衣服を着更え、静に病床を出て、官憲との應對に當った。

『てまえが李応ですが、何かの間違ひではないか。逮捕されるような覚えは身はない』

『だまれ。四散した祝家の夫人や家来から連名の告訴が出ておる。それによれば、汝は祝一族の者でありながら、わざと梁山泊との間に紛争を作り、彼らを手引きして、宗家を亡ぼし、後

日、莊の土地や金銀の分け前をとる内約していたということだ。言いわけがあるなら奉行閣下の前で申しのべろ』

『これは奇ッ怪な。察するに何者かの讒言と思われる。ともあれ念のため未亡人の血迷ったその讒訴状とやら又、お奉行直筆の逮捕状などもお示しいただきたい』

『オオ見るがいい。どうだ、返答あるか』

『なるほど……。ううむ、これは紛れもない登州の官印、又、告訴状もそれらしいが』

『はや言いぬけもあるまいがな。それッ繩を打て』

つづいて、与力は、
『当家的食客の杜興とかいう奴。そいつも搦め捕ったか』
と、後ろの人数へ言った。

杜興はすでに縛られている。それを見て、李応も観念した。覚えのない冤罪だ。公の法廷で堂々申し開くに如くはない、と。

馬に乗せられ、与力、捕手、獄役人などの大勢にとりかこまれ、泣いて見送る老人女子供らの家族へは、

『なあと、すぐ帰って来るからな』

さりげない笑顔すら見せて郷門を去って行った。かくて李家莊をあとに、急ぐこと八、九十里、一叢の雑木林の中にかかった。

『待てっ』

一声が静寂を破った。

立ちふさいだのは、豹子頭の林冲だった。つづいては宋江、花榮、楊雄、石秀などである。口ほどもなく、奉行与力以下の者は、

『あッ、梁山泊の奴らだ！』

と、白昼の妖怪でも見たように、李応、杜興の護送馬もそこへ捨てて、蜘蛛の子のごとく逃げ散ってしまった。

『とんだ御災難でしたな』と、宋江はただちに二人の縄目を解かせ——『じつは、お待ちしていたんです。撲天鵬先生、どうぞてまえ共と一しよに、ひとまず梁山泊へお越しください。決して悪くはいしません』

『お。あなたが、著名な宋公明か』

『そうです。お恥かしい者ですが』

『いかにもな。その御卑下はよく分る。この李応もまだそんな日蔭者の仲間におちぶれるほど身を持て余してはおりません』

『でも、今日は遁れても、いつかは必ず官憲はあなたを不問にしておきますまい。——梁山泊の軍勢が、みすみす自分らの管轄下に、こんな大騒動を起したのです。いわば彼らの落度になる。その罪はみんなあなた一人に被せようとするに極つてい

る』

『いやどんな難儀がかかろうとも、だ』

『それは御潔癖もちと強情に過ぎはしませんか。しばらくこの余熱をさまし、周囲のおちつきを見とどけてから、世間へお帰りある方が、諸事、無難でございましょうに』

杜興もそれをすすめ、呉用もまた、呉用一流の弁で、切にすすめる。そこで李応もついに我を折って、一行の中に入って行を共にし、やがて梁山泊の人となった。

といつても、正道の士、撲天鵬李応のことだ。あくまでここは飯の宿と見、毎日の聚議片における酒宴のもてなしにもついでぞ打ち溶けた風もない。——その日もまた彼は、梁山泊一統の

統領晁蓋の姿を見たので、

『総統、おねがいです。はや今日で五日目になる。家族らも気がかり。ひとまず、ここを出して、家へ帰して下さらんか』

と、やや哀調をもって嘆願した。

すると晁蓋は、かたわらの宋江、呉用らの顔を見て、意味ありげに笑って諾った。

『どうでしょう御両所。撲天鵬先生には、頻りにあ言っていますか』

『ははは。李大人。その御心配は、すこぶる変なものですな』

『どうしてです。呉学究どの』

『だって、あなたの御家族は、もはや李家荘にはおりませんぜ』

『えッ、居ない。では何所にいますか』

『ここにです』

『こことは』

『もちろん梁山泊。ついさっき、金沙灘の対岸の茶店から報らせがありました。ほどなくやって来るでしょう』

何を言うか、人を愚弄するにもほどがある。——李応はそう取ったものの如く不快な色を閉じてしまった。けれどこれは嘘でなかったのである。ほどなく山寨の下からこれへ登って来る群の蟻行列のごとき人影が見えだした。近づくに従い、李応は、アッ！ とばかり驚いた。その中にはわが妻子が見える、

男、や年来の召使い迄がいる。いや覚えのある家財道具までが百人余りの人間と数十の驢馬や牛の背に積まれてやって来るではないか。

『なんとしたことだ?』

彼は走り出して、まず妻にたずねた。妻や老人たちは、口をそろえて交々言った。

『旦那さま、ようまあ御無事で。あなたが、州の奉行所へ連れて行かれると、その晩でした。またそろ百人ほどな者が来て、否やもいわず、この通りにしてしまい、何でも来いという儘に、これへ曳かれてまいりました。——もう帰るにも帰る所はございません。莊を出るやいな、屋敷は炎になってしまいましたから』

聞く李応は、唯々、あきれるばかりだった。すると、後ろから追って来た宋江が、彼の前に膝をつき、両腕を交叉して、地に伏さんばかり詫びて言った。

『おゆるし下さい。まったくは、あなた方をあざむいたのです。それも久しい間、撲天鵬李応というお名を聞き及び、その為人をお慕い申していたからのことで、われらの内に、あなたを引入れたい一心のほかでしかありません。どうかひとつ御堪忍を。またわれわれの切な願いをば、ぜひおき入れのほどを』

『では一体、あの官人共は、何者であつたのですか』

『州奉行の争力とみせたのは、仲間の鉄面孔目の裴宣という者です』

『あ、あの有名な』

『ふたりの警吏は、偽筆の名人蕭讓と、篆刻の達人金大堅でした。そのほか捕手頭には李俊、馬麟、張順などが付いて行ったもの。——それらすべて、仮装仮面を脱つて、今夜はあらためて酒宴の席でお詫びすることになっています。——夫人や

御家族の老幼には、決して、ここでは御苦勞をかけません。平和な村作りをしていただく迄のこと。李応先生、なにとぞ、お覚悟をすえてください』

『ああ、それ程までにこのほうを』

李応はついに、腰をかがめて、宋江の手を取った。その手を押し頂いて。

『士は己れを知る者の為に死す。ぜひありません。死にましよう。死んで茲に生れおちたものと思いましよう』

『いまにわかりますが、これや天星宿地の宿縁なので、紛れなくあなたも仮に地へ生れ墜ちる約束事に依る天星の一つに違いありません』

このことばは、李応にはただ奇に聞えただけであらう。いやひとり宋江のみが悟っていた宿命観であつた。かつて見た不思議な夢告と、そのとき授けられた天書を繙いてから彼はこの梁山泊中の奇異なる生命のよりあつまりを、不可思議、かくのごときものかと、おぼろに信じだしていた。

山も酔い、波も歌い、馬や羊や家鴨までも踊り出しそうな「遊びの日」が、一日この泊内を世間知らずな楽天地にした。

李応を迎えたよろこびと、十二名の新入りとを、山寨中へ御披露におよんだ為である。かつは祝家莊から移してきた大量な分捕り物の豊年祝いという意味もなくなはない。

新入り十二人とは誰々か。

李応は別格とし。まず孫立、孫新、それから解珍、解宝、鄒

淵、郷潤、杜興、樂和、時遷。また女人では一丈青の扈三娘、おばさん飲屋のおかみ母大虫、樂和の叔母にあたる孫立の妻。以上である。

これらの新顔を入れた大宴の席で、宋江がふと言ひ出した。「どうでしょう。この吉日に、私は一組の新郎新婦を立てて、その媒酌人をつとめたいと思うのですが」

「えっ、誰と誰で？」

滿座は色めいた。とかく色香のとばしい泊内では、これは時なら花見にひとしい。

「花嫁は一丈青の扈三娘です。そして花婿は」

しんとまった。どこからともなく、熱い男臭い、溜息の波がつたわる。

「花嫁にくらべると、武芸人柄、少し品は落ちるが、花嫁には目をつぶってもらい、曲げて一つ御亭主に持ってもらいたい男とは、あれにいる王矮虎です。……女好きの矮虎です。……じつは彼の欲望をいましめるため、かつて清風山にいた頃、よく自戒するなら、いつかきつと私がよい女房をとirmotteやるど約束したことがある。男の一言は金鉄です。けれどなかなか山寨では良縁もなく、平常心の重荷としておりました。いかがでしょう、扈三娘さん」

人々は今さらながら宋江の義の堅さに打たれた。わけて扈三娘が生け捕りになって来てからは、宋江にたいして、とかくな蔭口も無くはなかった。——きつと宋先生だッて思ひ召しがあるにちげえねえ——と言ったような囁きがある。それが今、かくと披露されたので、思わずヤンヤンヤの拍手だった。矮虎はうれし涙を拳にこすり、扈三娘は頬を紅葉にしてただ俯向

いているのみ。然し宋江の真心には深く感じたもののようであり、素直にうなずいた。

折も折。こんな慶事にわいていたその日の午下り。はるか対岸の見張り酒店から、例の朱貴の使が、一舟を飛ばして告げてきた。

「鄆州の捕手頭、雷横さんてえお方が、旅の途中とかで、統領や宋江さまに会いてえと言っておりやすが」

「なに鄆州の雷横さんだと。それはわし達の恩人だ。すぐいねいにお迎えして来い」

晁蓋も宋江もまた呉用も聞いて、大いによろこんだ。——きつと彼の人も又、官途の腐敗にいびり出され、ついに梁山泊入りを決意して来たものに違いあるまいと。

だがこれは糠よろこびに過ぎなかった。会ってみると、少少、はなしの勝手は違っている。

「じつは県知事の命令で、東昌府へ出張しての帰り途だが、ここへ寄る気もなく、朱貴の茶店で一杯飲つてると、こいつ臭いと思つたか、いきなり子分共をケシかけて俺を撲りにかかったので、ぜひなく名乗ったついでに、各々の消息をちよつと聞いてみた迄の事なのさ」

「それはどうもはや……。あれいらいはお目にもかかれず、常々、お噂もしては、おなつかしく存じておりました。朱貴の無礼が、かえって倅せ。思わぬ日に、ご壮健を拝し、こんなうれしいことはない」

宋江が言え、呉用、晁蓋も共々に、

「どうぞ、ごゆるりなすってください。こんな時でもなければ、お心のあらわしうもない」

『ありがたいが、何しろ急ぐ公用なのでな』

『ま、そんなことを仰っしゃらずに』

『じゃ、せめて、一ト晩、厄介になるとしようか』

『いや幾日でも』

『そうはゆかない』

『ゆきませんか。残念ですな、どうも』

歓待の間々に、それとなく、仲間入りの水を向けてみるものの、雷横にはいっかとそんな気は無いらしい。『おふくろの年が年なので、郷里は離れられない』

と、老母思いな方へ話は移ってしまう。——で、結局、中一日ただけで、翌々日には、

『また、縁があったら』

と、雷横はサッサと草鞋をはき出して別れを告げた。いまはぜひなく、三名は舟で金沙灘を送って行き、街道に出て、袂をわかちに際し、

『なんぞ、ご老母さまへの、おみやげにでも』

と、一囊の金銀を彼に贈った。いやこんな物とは、断るのを、三名が強つてのことばに、ついに懷中におさめて去った。

あと見送って、三名は朱貴の店を覗き、

『そうだ、ここの店へは、もひとり楽和を手助に よこそ。こんな間違いでよかったが、何か事件を起しては困る』

と、呟いた。

それにつづいて、三名の主脳は、金沙灘から帰る舟中で、新黨員のふえたのを機とし、山寨の配備更えを協議した。東西南北、四つの見張り茶屋の一つには、ぜひ、母大虫おばさんに孫新を付けてやろうと、これも極まった。

新夫婦の矮虎と一丈青は、裏山の牧の馬監とする。

杜選、宋万は、宛子城の二の木戸の守備に。

劉唐、穆弘は本丸ざかいの三の木戸。

南山の水寨は、阮の三兄弟にあずける。

その他、造船廠、鍛冶房、錢糧局、織布舎、築造大隊、酪乳加工所、展望台組、倉庫方、邏警部など、あらゆる適所に適材をおき、水際巍然、少くもこの寨では、遺賢をムダに遊ばせておかない智慧が自然な地と水の如く、繞りよく思い巡らされていた。

一方、かの雷横は、

『母上、ただいま帰りました』

と、鄆城県のわが家に入るやいな、まず老母の室をみまい、あくる日はさっそく、県役所へ出て、出張先の要務を復命し、これでやっと、いささか身軽となった夕心地を、町辻の風に吹かれながら戻って来た。

すると、土地の遊び人で李小二という奴さん。出あいがいしらに、

『おお旦那あ、お珍らしいじゃござんせんか。いつお帰りで』

『いや帰ったばかりなのさ。まだ旅疲れだ』

『さいつあ、ちと、さっそく過ぎますが、どうです旦那。ひとつ面白れえ小屋掛け演劇を……いや演劇でもねえナ……水芸の太夫さんですがね、ちよつと御見物になりませんか』

『ふうむ、そんな旅芸人が土地へ来ているのか』

『聞きゃあ東京者ですとさ。別嬪ですぜ。いや何よりは、唄、彈奏、軽い茶番、何をやっても田舎廻りにしちゃあズバ抜けて

るんで」

『たいそうな惚れ込み方だな。そんなにいいなら、ぜひおふくろに観せてやりたいもんだ。そのうち弁当でも拵らえて、おふくろと一しよに観に行こうよ』

『……旦那、旦那。あれ、行っちゃうんですか。……けッ、よしやあがれ。捕手の先頭に立つと鬼にも見える雷横だが、へんなものだ。自分のおふくろには、目も鼻もありやしねえ。ふん、つまらねえ人間だよ』

おふくろ思いな雷横だが、老母の眼から見ればこの子にもたった一つ心配はある。悪癖がある。ほかでもない、酒癖がよくないのだ。

『ま。そうクヨクヨ言いなさんなよ、おっ母さん。雷横だって、いつまで心配をかける年頃でもねえさ。ましてや役署勤めの身だ、それに新しい知事さんに代ったから、このさいきつぱり禁酒ときめ、旅先から帰ってから、杯は手にしたこともねえんだから』

雷横は母へ言っていた。事実、家では飲んでいない。また外でも禁酒を公言していたが、友達はまだく違う。てんで信用してくれないのだ。

その夕も、役署帰りの辻酒屋で、彼はつい悪友共に飲まされてしまった。というよりは土根性から好きなのである。禁欲意識がふと破れると、逆に度を過ぎさせるものでもある。さあいけない。苦勞性なおふくろに、このグデングデンは見せられないうと頻りに悔やむ。だが、友達と別れてからも、なかなか酔は

醒めないのだった。

すると賑やかな演劇囃子が耳の穴へ流れこんで来た。はあ、いつぞや李小二が噂していた掛小屋だな。木戸の呼び声、旗幟のはためき。それに釣られてふらふらと雷横は泳ぎ込むように木戸口を通った。役署の「顔」が無意識な習性にある。小屋者たちも心得ていて、

『はい、旦那だよ』

とばかり、客席の中でも上等な棧敷へ御安座を奉る。といつても板の腰掛け、丸太の手欄。どっちみち雷横は「酔ぎまし」が目的なのでもうすぐそれに頬杖かけて、居眠っていた。舞台では今し水芸の女太夫白秀英が観客の大喝采をあげてサツと緞帳のうしろに姿をかくしたところらしい。

胡弓、長笛、蜜鼓、木琴、鉦などの合奏にあわせて真っ赤な扮装をした童女三人が炎の乱舞を踊りぬいてしばらくお客のご機嫌をつないでいる。——それが引つ込む。曲が変わる。——と今度は、孔雀扇を胸に当てた白衣黒帯の老人が尖がり靴をヒョコヒョコ舞台中央まで運ばせて来て、オホンと一つまず客を笑わせ、

『あいもかわりませず連日のお運び。てまえ白玉喬も大御満悦の態とござりまする。ただいま御喝采をいただきました娘白秀英の水芸はまだほんの序の口。いたらぬ芸にはござりまするが開封東京は花の都の教坊で叩きあげた本場仕込み。いささか、そんじょ。そこらの大道芸とは事違ひまする。ご当地では初のお目見得。吉祥の御縁結び。当人も大張り切りで、精を根かぎりに一代の芸を尽してお目にかけたいといつておりますれば、ゆるゆるとひとつ御観覧なあって永当永当御最良のほどを

宋江、約を守って花嫁花智を見立て。「別芸題」に女優白秀英が登場のこと

乞ひ希つておきまして——さて』

と、ここで口上の調子を変へ、次の芸当の筋書を述べていたが、雷横は夢か現で、あぶなく居眠りの眩を外すしかけ、はつと、居場所を思い出したように、急に舞台へ、赤い眼をしいて睨りだしていた。

すでに舞台では、花の精か、白鳥の霊か、満場、人なきような焦点に、舞い歌っているものがあつた。これなん人氣女優の秀英であろうか。雪の羅衣に、霞の風帯、髪には珊瑚の簪花に愛くするしく、桜桃に似る唇、蘭の臉、いや蘭の葉そのものの如き撓かな手ぶり足ぶり。その手には左右二つのカスターネットを秘し持ち、歌う鳥となり、柳の姿態となり、歩々憂々、鈴々抑揚、下座で吹きならす紫竹の笛にあわせ、開封竹枝のあかぬけた舞踊の粹を誇りに誇る。

『なるほど。評判だけなものはある』

雷横もふと、目を拭われた心地であつた。ひとしく満場の観客も、万雷のような拍手をせいに送る。するとこのとき、待つてましたというように、尖がり靴の白玉喬は、秀英のそばへ来て、お約束の肩を一つぽんと叩いた。

『おっと、太夫。何か忘れてやしないかね』

『あらひどい。わたしの踊りが何か間違つてたというの』

『何サ。都一の花の太夫。天女が雲から落ちる事はあつても、太夫さんの芸にソツがあるものか。お忘れ物というのはね』

『あ。あのこと』

『芸に無我夢中なのは結構だが、稀にはお客さまの顔いろも見て、お心もちを汲んで上げなければいけないやね。いまの御喝采の中には、祝儀をやれ！ 祝儀の盆を廻せ！ ッてな有難

いお声もあつたじゃござんせんか。次の芸題にかかる前に、どうですえ、こらで一つお志をいただいては』

『ま。うれしいわね』

『では、御意にあまえて！』

と、白玉喬は片手を腰に、また、片方の尖がり靴をびよんと前へ投げ出し、手にしていた薄手な盆を翳すなり見物席を眺め渡して、

『いやお待ちかねお待ちかね。さすが御当地のお客様は品がちがう。アレもう大様に御懷中物を解いていらッしやる。ヘイッ、ただいま御順にそちらへ頂戴に伺います。なんと太夫さんよ、かッちけねえ御見物衆じゃないか。おまえさんは舞台から精いッぱいその眼でいちいち御礼を申し上げるんですよ。……ヘイッ、唯今。おやじは唯今お盆を持って順ぐりそちらへ廻りまするで。はい。これはお嬢ッちゃん坊ッちゃんまでが。……へえい、お有難う。お有難うぞんじまする』

盆廻しは旅芸人の常套である。お客の方でも心得たもの。祝儀は見得坊な棧敷の上客がハズむものと知っていた。やがて雷横の前へ盆が廻つて来ると白玉喬は、いちだん愛想よく腰をかがめ、残り物には福、お大様は総括り、ヘイ一つお弾ずみをとうながした。

はつと当惑したのは、雷横だった。今日は友達の奢りだが、禁酒いらひは、酒の虫を封じするため、外でも紙入れは持たぬと極めていたのである。祝儀はやりたいが無一文だ。何ともかとも間が悪い。

『あつ、いけねえ』と、その袂さぐりはテレ隠しと誰にも分るような、下手い仕ぐさで『うっかり、紙入れを家に忘れて来て

しまった。二、三日うちに、おふくろを連れてまた見物に出直すよ。そのときにはうんと色をつけるからな』

『テへへへ。……有難うござんすと言いてえが、と、言ったお客に二度お目にかかったためしはねえや』

『何てえ笑い方をしやがるんだ。そうムキ出さなくても、てめえの出ッ齒は見え過ぎらあ』

『大きに悪うござんしたね。笑ってるのはお客衆だ。ねえ御見物、どうですえ、こんな棧敷の上席に、セセラ楊子で一杯機嫌の旦那がですよ、大きな面をしていながら、祝儀の出し惜しみに事を欠いて、人の顔の棚下ろしでゴマ化そうてえんだから恐れ入っちゃうじゃありませんか、ねえ、この吝たれな御面相でさ』

『なに、なに、吝たれだと』

『いいえね、旦那。不粋な文句はよしなせえ。意気で生きてる芸人だよ。気は心だ。一文二文の投げ銭でも、最前とあって下さる物なら有難えが、おまはんみたいいな野暮天の袂クソなんざ、くれるといつてもお断りだ。けッ、とんだ物に蹴つまずいて、すっかり場内のお客さんを白けさせてしまつたい。さあ、その脚の先を引っ込めておくれ。通行の邪魔にならあ』

『だまれ、この野郎』

『おや、大きく出なすつたね』

『な、なんとぬかした』

『二度言うて風邪を引かあ。おまはんみたいな人がよくいう見かけ倒しという代物だ。犬の頭に角が生えても、こんな朴念仁からカビも生えやしねえってことさ』

『言つたなッ』

雷横の母親がつねづね心配していたのはつまりこれだったにちがいない。ぐらつと彼のこめかみの辺をいはずまが走ったと感じたときは、もう白玉喬の体などは彼の一拳の下に素ッ飛んでいてそこらには見えもしなかった。そしてただ見る掛小屋じゅうの見物がわアッと総立ちになつて沸き、舞台の上の白秀英はといえ、演劇ならぬ悲鳴の演舞をクルクルさせて、下座や楽屋裏の者たちをかなきり声で呼び廻っていた。

本戸の外でも猫の干物と女狐 とが掴み合いの一幕の事

いつも朝は朝機嫌もよく二十日鼠みたいにクルクルと小まめな雷横の母であるのに、今朝はどうしたのか、しいんと南廊の小椅子にふさぎこんでいた。——ゆうべおそく泥酔して帰った息子の官服を膝にくりひろげて、泥を払い、ほころびを縫い、またふと、血らしい汚染に老いの目をしばだたいて、

『ああ、あの子はまた何をしたんだろ？……あんなに迄、かく、ふつり禁酒しましたからと、この母へは優しく誓ってくれていた子なのに。……やっぱり男の子という者は幾歳になつても』

と、独り胸を傷めている姿だった。

ところへ、玄関の方でどやどやと大勢の聲がした。出てみると、倅の雷横が勤めている役署の朋輩たちである。さあさあど

うぞと、老母は色をかくして愛相よく内へ請じた。けれど役署の同心と捕手たちは、外に突つ立ったまま気のどくそうに、

『じつは、知事の公命ですが』

と、まず断わって、やんわり言つた。

『雷横君は、どうしていますか』

『何ですか、俸はゆうべ、たいそう晩く帰つたものですから、

まだ今朝はぐッすり眠っておりますが』

『すぐ起して下さい。公命です。猶予はなりません』

『はい、はい』

老母はあたふた奥へ馳けもどつた。そしてしばらくすると、

当の雷横が、衣服を着け、やや腫れぼったい臉をもつて、

『やあ』

と、そこへ立ち現われた。いや、挨拶の間もあらばこそである。左右からバツと寄つた同僚がすばやく彼の両手へ手錠をかけてしまつた。

『おかしら。われわれ下役の者に、こんなまねをされちゃあ、

さだめし心外でしょうが、知事の命令なので、どうも仕方がありません。目をつぶって、とにかく、ゆうべの小屋掛けの木戸

まで歩いておくんなさい』

『え。小屋掛けてってえと？』

『おかしらがゆうべ、派手な事をなすつちまつた旅芸人の女太

夫白秀英の演劇小屋でございますよ』

『ああ、あの……』

雷横は、がつんと、しびれた頭を吹き醒まされた。が、さあ

らぬ顔で老母の姿へ言つていた。

『なあに、おっ母さん、じつはゆうべ、ちよいとした弾ずみか

ら、その小屋者と、ひよんな喧嘩をしちまつたんで。……なにもべつにそうご心配なさる程の事じゃありませんよ。すぐ帰つて来ますからね』と、一方の下役達へも、わざと笑顔を作つて見せながら、

『さあ行こう。こんど来た新任の知事さんも、物分りのいいお人だ。話せばわかつて下さるだろ』

と、すずやかに、我れから先にわが家の門を出た。

しかし例の町端ずれまで来てみると、事態の空気は容易でな

い。――ゆうべの騒動で太夫元の白玉喬は片腕を折ッびし

られ、下座出方の連中も、あたまを綱帶したりビッコを曳いた

り、かつは又、舞台もあれで中止となつてしまつたので、今朝

はそれらの客までが小屋前へ押しかけて、

『木戸銭を返せ！ 錢で返すなり、今夜の木戸札を、もう一度

無料で配れ』

などと昼からそこはもうたいへんな騒ぎなのだった。

県役署からは、べつな役人が来て、それらの群集をとりしず

めていた。そして手錠の雷横は、大勢の前で、知事の戒告文を

読み聞かせられ、木戸口に立っている幟旗の竿の下に曝し物と

してすぐ縛しつけられてしまつた。その懲罰の文に曰く。

県ノ与力、雷横

身、治安ノ警吏ニテ有リナガラ

大酒乱酔ヲ 恣ニシ

劇場ヲ騒ガセ、人ヲ傷ツケ

公安ヲ紊スノミカ

官ノ民望ヲ墜スコト 甚シ

依而

十二刻ノ「立チ曝シ」ニ処シ
是ヲ、諸民ノ指彈ニ委ス
鄧城縣知事

立て札の文字が雷横を射すくめてゐる。雷横は恥かしかった。文の通りであつたと思う。だがゆうべの事は半分以上覚えがない。——覚えてゐるのは太夫元白玉喬に人中で侮辱された刹那の憤怒だけである。

だが、あれがいけない。性来の自分の悪い酒癖だ。母にも禁酒を誓つてゐたのに。……要するに不孝の罰か。あまんにて十二刻の恥を民衆の前にうけよう。身の葉だ。と彼は観念の目をふさいで幟竿を背負つてゐた。

ところが本来なら、群集の弥次馬心理や日ごろの反官意識が当然、彼への唾ともなり悪罵や石つぶてになるべきなのに、

『おや、雷横の旦那が？』

『どうしてまた？』

と、気のどくそうに、目をそらす者はあつても、いい気味だと嘲るような副作用はほとんど見られなかつた。これというのも常日ごろ、捕手頭としての雷横には、多年の間、なんら諸民の怨みは買つたような事もなかつたのみでなく、官権を振廻したり私腹をこやすなどの不正もなく、親孝行者と知られ、弱い者には親切で男氣などということが、ふかくこの町一般の者に根ざしてゐたからにはかならない。

かつは又、下役や同僚の間にも、人望があつたから、今日の懲罰の番人に當つた者も、じつは、心ならずもしてゐる風がありありと見えてゐた。そのうちに、人もまばらな午過ぎになると、番の一人が、そつと幟竿の下へ寄つて来て、

『おかしら。……我慢しておくんないよ。今夜一晩だけのことだ。……それにしてもおかしらは、何も御存知なかつたんでございますね』

と、思いがけない事をふと雷横に聞かせてしまった。

『えっ？俺が何も知らなかつたとは一体どういうわけだ』
『こんど赴任して来た新知事と、ここの女とのわけ合ひでさあね』

『女』

『ええ。女太夫の白秀英と、こんどの知事とは、もうだいぶお古いレコなんですぜ。何しろ美しい女でさあネ。こんな田舎へ小屋掛けに来る芸人じゃあねえ。それが来たつていうのは、つまり自分の情夫旦那がこの土地の知事さんになつて来たからのことなんですよ』

『そうだったのか』

『何でも、お互いが開封東京にいた頃からの古馴染みですとさ。そいつを知つてたら、おかしらもね』

『遅かつた。いや然し、それなら知事さんもかえつて小屋側の者をなだめて、事を内輪におさめてくれるだろう』

『さ、どうでしょう。ゆうべも晩く官邸の裏門をくぐつて、白秀英と親父の白玉喬が、何やら訴えていましたし、今朝の知事の様子ッ振りじゃあ、どうやら女に泣きつかれたあんばいで、凄いいんまぐでござんしたからね。……あ、いけねえ、白玉喬が来やがつた』

太夫元の白玉喬は、縋帯した片腕を首に吊り、足も少しビツ